

音楽 6年B組	曲想を感じ取ろう —和音(Chord)の響き—	音楽科専科 江田 司
------------	----------------------------	---------------

1. 題材設定の理由

(1) 本実践の主張点

本実践の主張点は、楽譜上部に書かれた「コードネーム(和音名)」に着目することで、誰にでも「和音(Chord)」の響きを体験的に獲得できる方法を示すことにある。さらに曲想を和音の響きから感じ取っていく方法も明らかにしたいと考えている。

子どもたちに和声的な感覚を付けようとするとき、音階の1つ1つの音が主音(中心になる音:ハ調であれば「ド」)に対して様々な関係や性格を持つことが体験的に理解されていなければならない。教科書等では「重なり合う音の響き」として和音(や和声)を表している。「溶け合っている響き」か「溶け合っていない響き」かのレベルであり、[IIVV]の和音が持つ機能性にまで言及していない。いずれも和声的な学習への裏付けが希薄であることを示している。一方、中学校や高等学校の教科書に目を転じると「コードネーム」が教材にも加えられ解説とともに扱われている。小学校のこの時期に体験的に触れておく有用性は十分と考える。以下、「和音」と「和声」、「和音記号」と「コードネーム」について整理しておく。

「和音(chord)」:高さの違う2個以上の音が同時に響く場合に合成される音をいう。*

「和声(harmony)」:もっとも広い意味では2声以上の「和音」の連結をさす。*

*『新音楽事典〔楽語〕』(音楽之友社1977)より

・音の重なりや和声の響きに重点を置いた活動を通して、基礎的な表現の能力を高め、音楽表現の喜びを味わうようにする。

『小学校学習指導要領』(第6節音楽 第2 各学年の目標及び内容〔第5学年及び第6学年〕1目標(2))

・和音の取り扱いについては、I, IV, V, V₇などを中心とし、特に、低音の充実を考慮すること

『小学校学習指導要領解説 音楽編』(66頁)

(2) 教科提案とのかかわり～《ことば・動き・音》を関連付けて音楽の基礎・基本を育てる～

①《音》と《動き》を関連づける

毎日の授業始め「リクエスト・タイム」で使っている歌集『歌はともだち』。この本の楽譜にはすべて「コードネーム」が書かれている。楽譜の上に付けられた記号「F, C, Dm, Am～」がコードネーム(=和音名)である。コードネームの意味をまったく知らなくても、コード記号が書かれた楽譜を片手に様々な和音の響きを探っていくのである。小さな「m」が付いていれば「マイナー(コード)=短調の響き」と呼び、なければすべて「メジャー(コード)=長調の響き」である。たくさんコード記号があっても、小さな「m」付きの「マイナー」だけを見分けて音楽を聴けばよい。1年生でも「メジャーとマイナーの響きを聴き分ける」ことができるようになる。6年生の子どもたちは、これまでに「文節歌唱法」(歌詞をもとに文節の切れ目ごとにかざした掌を前後に返しながら歌う。このようにすると文節ごとに言葉の「頭出し」が自然にできるようになり、メリハリの効いた歌い方ができるようになる)を経験してきている。

◆手は「外界に出た脳」といわれるほどに、非常に大きな刺激を脳にフィードバックする。
〔視覚+聴覚刺激(脳)→手の動き(筋肉への運動刺激)→脳へフィードバック(視覚+聴覚再刺激)となる。〕

ここではコード記号によって《音と動き》を関連付ける「コード視唱法」(後述)を考えた。

②課題プリントの使用による子どもたち相互の多様な「気付き方・感じ方」の発見

子どもたちが持つ歌集「歌はともだち」の最終頁には、「覚えておくと便利」としてコードについての記述がある。まずこれを見て分かること・疑問に思うことを書かせてみた。一人一人の学習レディネスの違いがはっきりと現れ、これを一覽にして共通の課題を探らせた。

鑑賞の活動だけでなく、器楽や歌唱表現も通して「和音の響き」を体験させ、教科書教材から「メジャーコード」と「マイナーコード」が混在している曲を数曲選んで教材とした。『メヌエット』(クリーガー作曲)、『この星に生まれて』(杉本竜一作詞・作曲)など。また、修学旅行の学習会で子どもたちが非常に興味を持った『オブラディ・オブラダ』(ビートルズ)を英語で扱う中で、ほぼ3コード(B_b・F・E_b)でできているこの楽しい曲からコードに親近させた。いずれの曲からも課題プリントを作って、学習時に子どもたち相互が考え合う材料とし、学習の足跡を残せるようにした。様々な体験的活動を通して、最終的には「知識」として「コードネーム」の仕組みがわかるようにしたのである。

③場を設定する

座席配置、ペアによる教え合いを組織すること。グループ学習への発展を意図すること。これらはすべて個人の確立のためであり、さらにより高次の学習へと展開するためでもある。

今回の学習では、アルファベットを使ったり、和音や音の名前に対応したり、拍に乗って楽譜を追いかけたり、感覚的に音を聴き分けたりと、かなり煩雑な展開があった。当然のこととして、学習レディネスの差を視野に入れた。ここでは子どもの学習状況を常に見取りながら進めていったのであるが、「わからない」ことを常に課題となるよう心がけた。学習したことを模造紙に書いて張り出したのもこの理由による。考えさせた方がよいのか、説明した方がよいのか、あるいはしばらく放置した方がよいのか、常に予想を立てながら進めた。教師自身の即興的、反射的、反省的思考・態度を高めたのである。

2. 題材の目標

- 和音の響きの美しさを味わって聴いたり表現したりすることができるようにする。
- 曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。

この目標に迫るため、指導の観点として次の4点を〔題材の評価規準〕として設定した。

- ア 和音の響きに関心を持ち、美しい響きを求めて表現の仕方を工夫しようとしている。
- イ 声や音が重なり合う響きを感じ取って、美しく響き合う合唱や楽器の演奏の仕方を工夫している。
- ウ 語感や旋律の特徴を生かして、合唱したり合奏したりすることができる。
- エ 曲想の変化を感じ取ったり、移り変わっていく響きを味わったりしながら聴くことができる。

3. 題材計画（全8時間）

第1次 「コード」について知ろう。（4）

- ・「コード」って何！？（課題プリント：音楽学習カード1～2）
- ・『リクエスト曲』（各時間2曲ずつ）で「コード視唱法」にチャレンジ。
- ・『オブラディ・オブラダ』、リコーダー2重奏『メヌエット』の「コード」を調べよう。

第2次 「和音の響き」を感じて歌ったり演奏したりする。（4）

- ・「コード」をリコーダーで鳴らしてみよう。（ペア×2＝4人グループ：音楽学習カード3）
- ・『この星に生まれて』の「コード」を調べよう。
- ・杉本竜一の他の曲『Believe』『Tomorrow』と「コード進行」を比べてみよう。
- ・歌集「歌はともだち」から、メジャーコードばかりの曲を探して比較してみよう。
- ・「コード進行」を感じながら歌ったり演奏してみよう。

4. 題材の考察

(1) 主張点と関わって

【コード（Chord＝和音）視唱法】

準備物：コードネーム（和音名）が入った楽譜（指導書簡易伴奏譜または歌集）と範唱CD

- ①歌集など楽譜を片手に持つ。
- ②範唱CDを聴きながら空いた方の手の平を「メジャーコード」だと天井、あるいは「文節歌唱法」のように前方に向けて上げていく。
- ③「マイナーコード」だと反転して床（あるいは自分の方）に向けてグーッと下げてくる。
- ④最初はカラオケ（ピアノ版→オーケストラ版）に合わせてやるのがいい。
- ⑤慣れてきたら歌入りの範唱CDを使う。
- ⑥さらに慣れてきたら「マイナー」部分の伴奏を感じながら歌ってみる。こうすると「メジャー」を含め体全体で和音の響きや和声（ハーモニー）進行が感じられるようになる。

「コード視唱法」については、聴覚ではなく、コード記号を識別する視覚作用を頼りにする活動であるので、多少の煩雑さはあるもの子どもたちに受け入れられたようである。

次に、課題プリントを「音楽学習カード」の名前で4種類作った。これらの活用は、学習の「場」の設定と密接に結びつくもので、その効果と考察を述べる。

◇効果と考察【音楽学習カード1】

子どもたちの歌集『歌はともだち』には、ほぼ160余りの曲すべてにわたって「コードネーム」が付けられている。楽譜がある中で唯一の例外は『未知という名の船に乗り』（阿久悠作詞／小林亜星作曲／若松正司編曲）の2部合唱曲である。常日頃、本校伝統のリクエストタイム（出席順に毎時間2人ずつ歌集の中から自分の好きな曲をリクエストする。クラスの全員でこれを歌

う。1年生の1学期途中から6年間行われている)では、この「コードネーム」が話題に上ることではない。そこであえて、最終頁となり裏表紙の開きの所にある、「覚えておくと便利」から「コードネームの読み方」「主に使われるコード」「その他のコード」(資料略)を見て、「分かること・疑問に思うこと」を書かせたのである。その《集計結果(1)10月10日付》から、「知識」として子どもたちに伝えなければならないことが明らかになった。

◆アルファベットは音の名前を表している。◆Cが「ド」(ハ長調の場合の主音)である。◆だからコードのいろんな例としてCが多く使われている。◆○(丸)は全音符である。◆7が付くとなぜ全音符が4つになるのか。■いちばん下の音を「根音」という。■「根音」から7番目の音が4つ目の音だ。■7・9・11・13番目の音はあるけれども15番目の音は一巡して「ド」になる。だからC15はない。等々

◆効果と考察【音楽学習カード2】

「コードネーム」の学習ばかりだと理屈に偏るといけないので、リコーダー曲『メヌエット』や歌唱曲がほぼ毎授業の2/3以上を占めていた。そんな中《集計結果(2)10月12日付》で、子どもたち同士交流させてみることにした。資料と同じく(名前入り)一覧表《集計結果(1)10月10日付》を「音楽学習カード2」とともに配り、それぞれに読ませて疑問に思うことや分かったことを直接お互いに自由に話し合わせたのである。ここで1人の子どもが大活躍した。朝の会でまわりの子どもたちに「分からないから」と求められて、黒板に書きながら大いに説明していたと担任から報告があった。友だちの名前を書きながら、「本音」で「コード」に対峙している子どもたちの姿を読み取ることができた。また、ここで書かれていたことから「根音」と「主音」が混乱して用いられていることも分かった。

◆効果と考察【音楽学習カード3】

ここでは、これまで疑問に思っていたことを書かせてみることにした。①「全音符」の五線への書き方。②Cから始まる音階。③指定したコード進行を全音符で書く。④コードを実際に音の響きで味わってみる。とくに④の活動に手早く進めた子どもたちのグループでの活動は興味深かった。これはモデルとして前時に2人を指名して、Fのコード(ファ・ラ・ド)を私のあとに吹かせた先行経験が生きていたようだ。マイナーコードは第3音を少し大きめに吹くときれいに響くのだが、子どもたちから「きれい！」と驚きの声が出た。ここで③のコード進行をすばやく見つけた子どもは、学習に積極性を増した。ほぼ全ての子どもたちがお互いに教え合いを始めた。留意点として「いくら隣(ペア)が困っていても助けにいったはいけない。」「おせっかいになることもある。」しかし「もし“助けて(教えて)”というのであれば、“はい、喜んで!”と教えて上げなさい。」と子どもたちに伝えておいた。“教え合う”状況は子どもたちの気分を非常に楽にさせたようで、学習は活発化した。ここまでの4時間の扱いを必要とした。

◆効果と考察【音楽学習カード4】

指導に対する子どもたちの評価でもある。ここでは「バスライン」という言葉を使って、「コードネーム」が実は「バス」音をも表していることを知らせた。E m/G(イーマイナー・オン・ジー)の意味を子どもたちは知ったのである。【カード3・4】の学習はどちらかといえば音からは遠ざかった学習であったので、1人の子どもはしきりに「むずかしい」と言っていた。そこで「メイジャーコードばかりでできた曲を探す」ことから、一度目先を変えてみようと思いついた。「知識」「技能」「能力」の3点セットを学習の中核に据えるとき、音楽科においてもやはり「(音符やことばを)書く」ことが大切になる。

(2) 互いのまなざしが響き合う姿は

課題プリントを挟んでペア学習(4人グループ学習)を行う際に見られた。設定した課題が適切な困難さを含んでいるかが大切なポイントとなる。指導計画、教材選定は、課題に対する子どもたちの反応を見ながら修正を加えていった。

当初の予定では『この星に生まれて』『Believe』『Tomorrow』(いずれも杉本竜一作曲)のコード進行を比較から響きに親しむとした。後でその理由を述べるが、子どもが自分たちで進めていく課題としては、かなりの困難を伴うことが判明した。そこで音楽の毎時間「リクエストタイム」で使っている歌集〔2訂版『歌はともだち』教育芸術社〕に着目した。一冊丸々を教材として、「メイジャーコード」ばかりの曲を探し出して、「マイナーコード」を含む曲との比較をさせる。この方が、子どもたちが自分の感覚や考えで行動できる。身近な教材であるだけに「学び合う」姿が期待できたのである。収録164曲のうちコードネームがないのは合唱曲1曲。歌詞のみが4曲。「メイジャーコード」ばかりの曲が21曲(約13%)であった。〔下表〕

【メイジャーコードばかりでできている曲：2訂版『歌はともだち』から】

◆『ありがとうさようなら』(井出隆夫作詞/福田和禾子作曲) ◆『アルプス一万尺』(作詞者不明/アメリカ民謡) ◆『あわてんぼうのサンタクロース』(吉岡治作詞/小林亜星作曲) ■『いるかはザンブラコ』(東龍男作詞/若松正司作曲) ■『お正月』(東くめ作詞/滝廉太郎作曲) ◆『きよしこの夜』(由木康作詞/グルーパー作曲) ◆『里の秋』(斎藤信夫作詞/海沼実作曲) ◆『静かな湖畔』(作詞者不明/外国曲)

- ◆『すいかの名産地』(高田三九三作詞/アメリカ民謡)◆『すうじのうた』(夢虹二作詞/小谷肇作曲)
- 『せいくらべ』(海野厚作詞/中山晋平作曲)◆『空を見上げて』(峯陽作詞/黒人霊歌/小森昭宏編曲)
- 『たなばたさま』(権藤花代・林柳波作詞/下総皖一作曲)■『茶つみ』(文部省唱歌*歌詞のみ掲載)
- ◆『Happy Birthday To You』(P.S.ヒル・M.J.ヒル作詞作曲)◆『Head, Shoulders, Knees And Toes』(作詞・作曲者不明)
- ◆『The Hokey-Pokey』(作詞・作曲者不明)■『ほたるの光』(稲垣千頴作詞・スコットランド民謡)
- 『もみじ』(高野辰之作詞/岡野貞一作曲, 文部省唱歌)◆『喜びの歌』(岩佐東一郎作詞/ベートーベン作曲)
- ◆『笑いのカノン』(杉本竜三作詞・作曲)

* ■=教芸教科書と重なる曲。『われは海の子』は歌集ではマイナーコードが使われている。

「さあ、歌集から“メジャーコード”ばかりでできた曲を探してごらん。」の声に、喜々として子どもたちは曲名や載っているページを発表した。どんどん黒板に書いていく。出揃ったところで「どんな感じの響きがするだろうか、予想できるかな?」と言って、一節ずつ歌わせた。明るい歌声が教室に溢れる。冒頭歌った『ありがとうさようなら』は「あまり知らない」と言うので、範唱CDをかけてみることにした。ピアノ伴奏に続いて歌い出される声に、子どもたちが複雑な表情を見せる。こういうときは聴き終えたあとで「さあ、どうぞ。お隣の人の感想を聴いてごらん」と言うことにしている。そして私は子どもたちの中に入って意見を聞き回る。予想では「明るいはず」の「メジャーコードばかりの曲」が、実際に聴くと「暗い!」のだ。これは一体どうしたことだ! ちょっとした驚きだった。聴き終えたあとの感想は次の通りだった。

- ◆「ちょっと暗い感じ」「元気な感じではない」「さみしい感じがした」「メジャーコードのイメージと違う!」「声を抑えて高い声で歌っている」「元気なところもあったけど、暗いところもあった」「明るい感じのメジャーコードがさみしそう」◆「自分が持っていたイメージは明るいイメージなのに、暗いイメージで、前奏にマイナーコードが入っていた」「前奏にだけ入っているマイナーコードがどれか分からない」「メジャーコードって楽しい歌ばかりだと思っていたけど、この曲はそうじゃなかった」◆「フラット(の記号)がいっぱいある」◆「やさしくて話すような感じ」「やわらかい」「呼びかけている」「思い出を振り返るよう」

課題プリントを挟んでのペアから4人グループは効果的で、さまざまな「感じや気付き」が出された。学習《ありがとう・さようなら》の歌唱部分を、はっきり「暗い」と感じている子どもが36名中31名(86%)いた。困った。当初の“メジャーコードばかりの曲”と、“メジャーとマイナーコードが混在した曲”とを比べると“メジャー・マイナーの響きの違い”がよく分かるのではないかとしたコンセプトが崩れたからだ。そこでなぜ予想に反して“メジャーコードばかりの曲”を「暗い」と感じたのか、探ってみることにした。子どもが「学ぶ」授業を構成するには比べられる演奏が欲しいと探したところ、[ビーカブー/吉田直子(大人の男声2人と女声)]の演奏があった。「明るい!」「前奏にマイナーコードもない。」これなら使える。調べてみると「NHK みんなのうた」収録曲とある。

聴き比べる。合唱版とは逆に29/36名(80%)の子どもたちが、「NHK みんなのうた」版を「明るい」とした。「違いは何か」ここでやっと対比的に聴き比べてみる事ができた。ペアで話し合せて感想をまとめさせた。明るく感じる理由としては、①テンポは同じだけれど、幾分短め(マルカート)に歌っている。②「あ段」のことばの処理が明るい。③全体に笑顔で歌っている感じがする。④伴奏で使われている楽器がいろいろある。④歌が明るくてもハーモニカがしんみりと名残を惜しむ感じを出している。その他、印象に残った意見「メジャーコードと感じないで歌わずに、曲想だけを感じて歌うと違う(マイナーっぽくなる)。」があった。

5. 成果と課題

(1) 成果

- ◆学習を活性化するあるいは高次なものへと導くために高めにレベル設定した学習課題。および何枚かの発展的な課題(学習)プリントを挟んだペアや4人グループ学習が効果的である。
- ◆「コードネーム」を使って「和音の響き」をごく自然に感じ取らせるには、歌詞に含まれる文節変化と和音の変化がある程度一致した教材を選ぶことで、《音》と《動き》を関連付けてことができる。つまり《ことば》の要素を見落とすことはできない。
- ◆《ありがとうさようなら》の演奏比較から、テンポや音色や音の重ね方(いわゆる曲想の種々の音楽的な要素)あるいは歌詞によって、メジャーコードばかりの曲が、実際「明るく」感じられない場合だってあることが分かった。コードの響きや特徴を際立たせて聴き手に感じ取らせる学習には、教材選択の観点としてこれらが比較できる複数の音源を用意する必要がある。

(2) 今後の課題

- コード[和音]からハーモニー[和声]の学習へと展開するためには、音そのものが持つ性格、運動性の学習が低学年から不可欠である。さらに教科書の教材配列が、和音的に単純から複雑へと向かうのに対し、単純な和音で和声を扱うのが高学年。この矛盾は再考の余地がある。